

「燃えていた心」（ルカによる福音書二四章一三〜三五節）

1 復活の朝

今日は復活祭、イースターです。イエス・キリストが死人のうちから甦ったことを喜び、祝う、記念の日です。

キリスト教の記念日は、考えてみると、自然のサイクルと関係しているところがあります。クリスマスは世界に光が戻ってくることを象徴していますし、聖霊降臨祭はじつは収穫の祭りと関係があります。そしてイースター、それは春の到来、そして命の再生と連動しています。

いま桜が満開です。春が来て命が芽吹きます。冬は過ぎ去った。これから少し寒い日があっても、冬が去ったという事実は逆転されません。ちょうどそのように主イエスの甦りも、もはや決して死の暗やみへと後戻りすることはありません。甦りのイエスにおいて現実となっているのは、死ではなく命、暗やみではなく光、人の罪ではなく神の恵みです。

それはなるほど曇らされることがあるかも知れない。見えなくなることがあるかも知れない。しかし雲で遮られ見えなくても太陽はそこにあり、暖かさも変わらないように、神の新しい現実こそ本当の現実、私どもの人生の基準なのです。

さてこの一ヶ月半に及ぶ受難節、私どもはルカによる福音書によってイエスの十字架への歩みを辿って、ここまできました。

先週私どもが読んだように、イエスが十字架で死んだのは、ユダヤの暦でニサンと呼ばれる月の一四日、金曜日の午後三時ごろでした。夕方、日没前に、遺体は、アリマタヤのヨセフの手で取り降ろされ、だれも葬られたことのない墓に葬られます。葬りを見届けたのは婦人たち、イエスの十字架を「遠くに立って」（四九節）見守ったあの婦人たちでした。

この婦人たちが、埋葬から三日目、すなわち、日曜日の朝早く、準備していた香料をもつて墓に行ったのです。マグダラのマリア、ヨハナ、ヤコブの母マリア、その他の女性たちでした（二〇節）。

（いま申し上げているのは、今日の聖書箇所の一つ前、二四章一〜二二節に書いてあることです。こゝは、じつは昨年度取り上げたところで、あのとときも対面の会堂の礼拝を中止していたときでしたので記憶が薄いかも知れませんが、今日の聖書箇所から外しています。ただ深く関係しているので今日も触れておきます）。

墓に赴いた婦人たちが、そこに見いだしたのは、その墓は空っぽだったということでした。入り口を塞いでいた非常な大きな（マルコ一六・四）石がわきに転がしてあり、中に遺体はありませんでした。遺体がないことが、そのままイエスの甦りを示すものでないことは、いうまでもありません。イエスの復活は天使によって告げられます。天使は「途方に暮れていた」（四節）婦人たちに、かつてイエスが語られたことを思い起こすように言います。彼女たちは、イエスの言葉を思い出した」（八節）とありますので、イエスの十字架の死と復活を理解したようです。その上で戻って弟子たちに、「十一人とほかの人皆に」（九節）、すべてを知らせたのです。その反応は

こうです。

使徒たちは、この話がたわ言のように思われたので婦人たちを信じなかった。しかし、ペトロは立ち上がって墓へ走り、身をかがめて中をのぞくと、亜麻布しかなかったので、この出来事に驚きながら家に帰った（一一〜一二節）。

「使徒たちは」と始まっていますが、ここにいたのは彼らだけではない。十一人の使徒だけでない。それ以外の弟子たちも多くいました（九、三三節）。婦人たちの知らせを聞いてすぐに墓に走って行って、空なのを確認したペトロのような人たちもいますが、しかし彼もふくめて皆が、婦人たちの証言を「たわ言」と思い、これを信じなかったのです。

2 エマオへの道

さて今日の聖書箇所、その最初の節を見ると、そこに「二人の弟子が」と書いてあります。これはそのまま訳せば「彼ら、のうちの二人が」です。お分かりだと思いますが、この二人とは、いま申し上げた、婦人たちの話を「たわ言」と思い信じなかった弟子たちの中の二人です。一人は「クレオパ」という名前です。ですから使徒ではありません。その信じなかった彼らが信じるようになった出来事、これが、私どもが今日読むエマオ途上の物語です。

ちようどこの日、二人の弟子が、エルサレムから六スタディオン離れたエマオという村へ向かって歩きながら、この一切の出来事について話し合っていた。話し合い論じ合っていると、イエスご自身が近づいて来て、一緒に歩きはじめられた。しかし、二人の目は遮られていて、イエスだとは分からなかった（二三〜二六節）。

「ちようどこの日」とあります。十字架の死から三日目、イエスが復活した日、日曜日、その午後から夕方にかけてのことです。

エマオは、エルサレムから遠くないところにある村です。「六スタディオン」離れていたとあります。約十キロメートルです。そこを目ざして歩いて行く二人はきつとその村の出の弟子だったと思います。二人は、農民として、絵に描かれる場合も多いのです。

いま都を離れ故郷に帰って行くこうとしています。イエスに出会った、そして従って歩んだ日々、それはもう終わったのです。この道行きはもう一度昔の、イエスと出会う以前の生活に戻っていくことを意味していました。しかし話題はイエスのことばかり。歩きながら「話し合い論じ合っていると」という言葉には、イエスの十字架のこと、婦人たちに彼らにもたらした、まさに「たわ言」のように思われたイエスの復活のことなど、何をどう考えたらよいのか、あの日の弟子たちすべての未整理な心が表れているようです。

二人の旅人の対話は、やがて、この二人にいつの間にか加わったもう一人の人との

間の対話になっていきます。もう一人とは、いうまでもなくイエスご自身ですが、二人はそれとは分からなかったのです。

何の話をしているのかとイエスに問われて、二人は、「暗い顔をして」立ち止まったとあります。しかしやがて二人は語り出します。長くなりますが、もう一度読んでおきましょう。

ナザレのイエスのことです。この方は、神と民全体の前で、行いにも言葉にも力のある預言者でした。それなのに、わたしたちの祭司長たちや議員たちは、死刑にするため引き渡して、十字架につけてしまったのです。わたしたちは、あの方こそイスラエルを解放してくださると望みをかけていました。しかも、そのことがあってから、もう今日で三日目になります。ところが、仲間の婦人たちがわたしたちを驚かせました。婦人たちは朝早く墓へ行きましたが、遺体を見つけずに戻ってきました。そして、天使たちが現れ、「イエスは生きておられる」と告げたとのです。仲間の者が何人か墓へ行って見たのですが、婦人たちが言ったとおりで、あの方は見当たりませんでした（一九〜二四節）。

この彼らの説明は簡潔で、しかも正確にイエスについて語っています。それはそうだけれども、いまこうして読んでも、私どもの耳に響くのは、すべてが過去形で語られているということではないでしょうか。すべては終わった。そしてすべては過去のことになった。従ってイエスこそ救済者と、彼らがかけていた希望もまた過去のものとなったのです。

「もう今日で三日目になります」というのは、死者の霊は三日間遺体にとどまってその後離れるという俗信があったためとも言われています。ですから望みは、今日で完全に潰（つい）えたのです。

これらの言葉の中で、ただ一つ現在形のところがあります。いうまでもなく、天使の言葉の中にある、「イエスは生きておられる」です。二人にとってすべては過去となった。しかし天使は、イエスを生きておられる方として語っています。そしてそこに希望が織り込まれていたはず。しかし彼らにはそのようなものとは聞こえませんでした。信じない者から信じる者になるとは、イエスを現在います方として告白することにほかなりません。

3 主よ、ともに宿りませ

どのようにしてイエスは、彼らにとって、過ぎ去った存在から、いまも生ける主となったのでしょうか。

一行は目ざす村に近づいたが、イエスはなおも先へ行こうとされる様子だった。二人が、「一緒にお泊まりください。そろそろ夕方になりますし、もう日も傾いていますから」と言って、無理に引き止めたので、イエスは共に泊まるため家に入られた。一緒に食事の席に着いたとき、イエスはパンを取り、賛美の祈りを唱え、パンを裂いてお渡しになった。すると、二人の目が開け、イエスだと分かっ

たが、その姿は見えなくなった。二人は、「道で話しておられるとき、また聖書を説明してくださったとき、わたしたちの心は燃えていたではないか」と語り合った（二八〜三二節）。

エマオまでの道行き、途中加わったのがイエスだと二人に分かったのは、一緒に食事の席に着き、イエスがパンを取り、賛美の祈りを唱え、パンを裂いて二人にお渡しになった、そのときでした。

一番近いところでは、四日前、最後の晩餐のとき、いやそれよりずっと前から、例えば五つのパンと魚二匹で五千人の人を養ったときも（九・一六）、イエスは食卓の主として振る舞われた。その姿が、いまここで、エマオでの食卓で、二人に鮮やかに甦ってきたのです。それが、この方がイエスだと、イエスは生きておられるのだと確信させたのです。

二人に、希望が、再び戻ってきました。イエスがガリラヤで開始した宣教は（一九節）イエスの死で終わったのではなく、なおつづいていくのです。現在のこととしてこれからもつづいていくのです。「神と民全体の前で、行いにも言葉にも力のある預言者」イエスの働きは、その渦の中に彼ら二人を巻き込み、そして私どもを巻き込みつづいていくのです。その働きは終わっていない、過去のことではない。その希望の歴史に私どもも招かれ、そこに参与しているのです。二千年前ガリラヤでイエスによって始められた神の国が、なお前進していく、それを確かなものとするのは、イエスは生きていくということです。

ところで、最後の段落のはじめ、「一行は目ざす村に近づいたが、イエスはなおも先へ行こうとされる様子だった」（二八節）というのは、いまも私には少し分かりにくい言葉です。

ある人が、それは、イエスが、この二人の弟子を試されているのだと説明しているのを見つけて、そうかなと思いつつも、心に残っています（A・シュラッター新約講解）。二人がイエスをそのまま行かせてしまうのか、それとも、主よと言って、もつともこの段階ではイエスとは知らないのですが、なおあなたを必要としていると懇願するのか、しないのか、試そうとしているのだと。

正解かどうかはともかく、二人がイエスを「無理に引き止めた」ということ、それは彼らの信仰といていいと思います。そしてその信仰は、道々、イエスの聖書の説き明かしを聞いて心燃やされて生まれたものに違いありません。イエスはご自分のほうから私どもに近づいてこられます。意気消沈し、望みも断たれたかに思われ、とぼとぼ歩いている私どもの歩みに同伴し、ときに叱責しつつ（二五節）、しかし言葉をもつて、その説き明かしとともに働くみ霊をもつて私どもの心を燃やしてくださる方なのです。

ヘンリー・ライトの讃美歌を思い起こします。「日暮れて、やみはせまり わがゆくて、なお遠し。助けなき身の頼る 主よ、ともに宿りませ」（二一八番、「旧」三九番）。「主よ、ともに宿りませ」、このわれらの祈りに応えて、復活のイエスは私どもにも宿ってくださいます。教会に宿って救いの歴史をつくってくださいます。この信仰に固く立ち歩んでまいりましょう。